

誰々が する 何々を・・・——語順と有標性・類像性

日本語と英語の著しい違いの一つとして、語順(word order)(=文中での語の並べ方)の違いがあります。昔(あるいは大昔と言ったほうがよいかもしれませんが)の中学生は、英語の語順について学校で次のような口調で教わっていたことがあるそうです：

(1) 誰々が する 何々を どんなふうに どこどこで いくつか

「誰々が」というのはここでは「動作行為の主体」を指し、これは文法的には「主語(subject, S)」に対応します。「する」はその「動作行為」で、文法的には「述語動詞(verb, V)」に対応し、「何々を」はその「動作行為の対象」で、文法的には「目的語(object, O)」です。「どんなふうに」「どこどこで」「いくつか」はそれぞれその動作行為の「様態」「場所」「時」で、これらはいずれも文法上は「副詞的要素(adverbial, Adv)」になります。例で見てみましょう：

(2) Jane sang the song very beautifully at the concert yesterday.

(2)においては、Jane=動作行為の主体(S)、sang=動作行為(V)、the song=動作行為の対象(O)、そして very beautifully, at the concert, yesterday がそれぞれ動作行為の様態(Adv)・場所(Adv)・時(Adv)になります。文法要素を順に示すと次のようになります：

(3) S+V+O+Adv(様態)+Adv(場所)+Adv(時)

(3)はS・V・O・Advという4種類の文法要素を含んでいますが、このうちAdvはもしそれを省略しても文は成り立つものであり、文の成立上重要なのはS・V・Oの3つです。このような、文の構成上重要な要素に着目して文を分類したものを文型(sentence patterns)と呼びます。(3)は従来の分類ではいわゆる「第3文型」に相当します。

第3文型はS・V・Oを文構成上の必須要素とするものですが、第3文型の文においてS・V・Oの3要素がいつもこの順に配列されるとは限りません。次例を参照：

(4) Which book did you recommend?

(5) This book I can't recommend. (この本は(私は)おすすめてできません)

(6) America, love it or leave it. (ベトナム戦争に反対するなら(=アメリカがいやなら)アメリカから出ていけ)

(4)(5)においては、O(目的語)である which book, this book はS(主語)である you, I よりも前に置かれています。(6)においては、V(述語動詞)の love および leave の後に O(目的語)の it はありますが、Vに対応するS(主語)はなく、おまけに文頭に America という語がカンマとともに置かれています。これらは通常の第3文型の文とは異なり、S+V+Oの順に要素が並んでいません。すなわち、通常の語順(=S・V・Oの3要素がこの順に配列された語順)を逸脱した語順ということになります。このように、ある文法上の特徴(語順など)に関して通常の／普通の場合とそうでない場合が対照を成している場合、前者を無標(unmarked)、後者を有標(marked)と呼んで区別します(cf. Berk 1999: 51, 52)。第3文型において、S・V・Oがこの順に並んでいれば語順に関して無標ということになりますが、(4)(5)(6)のようにそうでなければ語順に関して有標ということになります。

(4)(5)(6)の有標性(markedness)についてもう少し見ていくと、(4)は「Wh 疑問文(Wh-questions)」で、通常の場合(すなわち、「平叙文(declaratives)」)とは文の種類が異なるものです。(5)は「話題化構文(topicalization)」と呼ばれる特別な構文で、文の一部(ここではO(目的語))を文頭に置くことによって作られます。(6)は文の種類点では「命令文(imperatives)」、構文点では「左方転移構文(left dislocation)」になっています。左方転移構文は、文中の名詞句を文頭に置き、空(empty)になった元の位置を代名詞で満たすことによって作られます(したがって(6)の場合、根底の形は Love America or leave America. です)。

(4)(5)(6)はこのように、通常の場合——無標の場合——とは文の種類や構文の点で異なるものであることとなりますが、このような有標の形式——すなわち、特別な形をしたもの——は無標の形式とは異なる特別な表現内容に対応しているという点に注意する必要があります。(4)はWh 疑問文ですが、疑問文は平叙文と異なり、話者が持っている情報を聞き手に伝える通常の文ではなく話者にとって不明な点を聞き手に問うものであり、これは<情報の伝達>が文表現の通常の機能だとすると特別なものということになります。(5)(6)の場合、話題化構文・左方転移構文は(4)と同様、要素の倒置(inversion)を含むものですが、これらの場合倒置された要素は情報伝達上の<焦点(focus)>として強調されたり、(聞き手の)注意が誘導されたりしており(cf. 本多 2009)、その意味において通常の場合とは異なった特別な内容の表現に関わる構文ということになります。

このように、語順に関する種々の有標の形式はそれぞれ特別な表現内容に対応するものですが、これは特別な形は特別な意味内容を表すという、言語の一般的な傾向性に合致するものです。これは要するに、形と意味が似ている(=「意味」が特別なならば、それを表す「形」も特別なものになる)ということであり、<類像性(iconicity)>と呼ばれる言語記号を含む記号の一般的な特徴の一つです。